

秋吉台パークボランティア 第45号 1-15, 2009

秋吉台パークボランティアの会 会長 末永豊明

事務局 美祿市秋芳町秋吉台山 秋吉台管理事務所内

TEL.0837-62-0640

FAX.0837-62-0324

あけまして

おめでとうございます

秋吉台の2009年の元日の早朝の天候は雪だった。しかし夜明けが近づいてくると、雲間に青空があらわれ、雲の中から太陽が現れてきた。雲の中から出てくる太陽は、いつ見ても幻想的だ。

神道でも、仏教でも、太陽はあらゆるものの根源で、地球にとって最も大切なものだ。太陽がなければ、地球上に生命は生まれなかった。

私たちの秋吉台パークボランティアの会は、秋吉台の修復、エコツアーの開催、やまぐち自然共生ネットワークの活動に参加など社会的な貢献に目を見張るような活躍を続けている。行動する会が高く評価され、それに比例して社会的な要望も多くなることが予想される。だからそれに対応した体制づくりに取り組む必要がある。私たちの会はこれまで、スロー



ライフを楽しむことで、時間をかけて、じっくりと忍耐強く秋吉台の修復に取り組む姿勢をわづらってきた。このあたりで、基本方針を再検討をする議論を行わなければならないだろう。まず、会員の若返りをおこなおう。

会がこの世界で生き残るためには、改革を続け、次々と新しい風を入れて、活力を強化すべきである。

私たちの会はこの4月で会結成十周年を迎える。そこでこの10年間にした仕事や会員の状況を詳しく記録し、全国の人々に伝えよう。「あんな楽しいことがあった」とか、「こんな表彰を受けた」とか、「こんな悲しいことがあった」とか・・・何でも記録しておきたいと思う。ご意見があればどんどん提言してください。

体裁は資料集より読み物風にして、囲みで記録資料を挿入するといった冊子がいい。皆さんでいい知恵を絞り、味わいのある冊子にしましょう。

カルストの狩人 (1) 闇女

平成 20 年 12 月 26 日、27 日に、大学生を主体にしたエコツアー研修会を実施した。場所は秋芳洞の琴が淵探検。このツアーの目的は洞窟を探検して、洞窟の本体を学ぶ大学生に、どうすればうまい指導をすることができるかを学ぶことだった。

洞窟の本質は、地下に広がる闇の世界だ。もちろん、温度が 16~17 度で四季を通じて一定で、また湿度が 100 パーセントと高い。しかし、闇が最も大きな特徴だ。

闇は、科学的には太陽の光が到達しないことで、「目動物」である私たち人間はあまり親近感を持ってない。太陽は核融合で大きなエネルギーを放出するが、光は波の形で宇宙に向かって放出される。この波は大きなエネルギーをもっているため、地球では植物がこのエネルギーをとらえ、水と二酸化炭素を材料に有機物を作りだし、生きてゆく。生命の根源は太陽だ。

太陽の光は生物にとって有害なものも含んでいるので、生物は身を守るために体表に体色をもっている。ところが地下では、太陽の光が到達しないので、洞窟生物はほとんど透明で、色素を持っていない。

闇の洞窟で、懐中電灯の光を照射すると、白い粒子が空間を埋めているように見える。湿度 100 パーセントの中で生まれた水蒸気の小さな粒子だ。

私たちは、暗闇の洞窟を体験していると、どうしても闇の正体を突き詰める必要に迫られた。闇は闇の粒子があるのではなく、光の波が存在しない、「無」の世界だ。「光は闇に穴をあける」と表現する人がいるが、彼らは無意識に闇の粒子の充満を想定したのだろう。



洞窟を探検する大学生とボランティア

秋芳洞の伝説には「鬼女」が出てくる。闇にすみ鬼だから透明な姿をしているはずだ。こうなると、「鬼女」は「闇女」で姿は透明のはずだ。この透明な女は肉食なので、人だつて食べる。

闇女は、他界の入り口に住んでいて、侵入してくる人間を食べてしまう。いずれにしても、ここは異界である。文学では、洞窟には異界があると考えている。

小説家吉屋信子は秋芳洞にやってきて、「鍾乳洞のなか」という小文を書いた。吉屋信子の祖父は萩出身で、新聞小説「安宅家の人々」の取材のために萩に来た。その途中、秋芳洞に入った。中は怪奇な世界で、奥にゆくにつれ、気味が悪くなった。

私はどこまで案内されてゆくのだろうと、遠くの方へ眼を向けたが、私たちのいる位置より、遥かに高い洞内の道のほたり、そこに電燈の光の及ばないような道をふらふらと辿ってゆく一人の姿が見えた。それが林美美子さんらしいのだ。

私は、はっと息をのんだ。(そんな事があり得る筈はない) と思いながら、なんだかそうであってもよさそうな気がした。

林美美子はその時もう死んでいたのだ。洞窟は死んだ人の現れる不思議な世界らしい。

秋芳洞開洞100年、みんなで 考えよう、どう参加すべきか

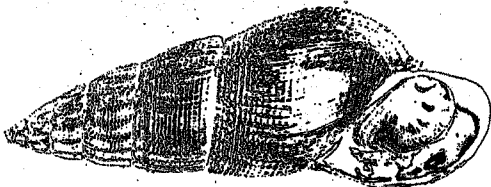
秋吉台観光の中心は、何といたっても秋芳洞観光だ。明治のころ、この洞窟のすごさに注目したのは梅原文次郎という青年実業家だ。当時梅原は長登銅山の経営をしていた。日清戦争で高い利益を上げた梅原は秋芳洞（当時は滝穴と呼ばれていた）の観光開発に乗り出す。

明治42年に開窟式を開き、洞窟観光のスタートを切る。開窟式のイベントは草競馬、レコードコンサート、相撲大会などだった。それから100年がたった。

今年、美祿市は秋芳洞開洞100年の記念事業を実施する。その主な計画が明らかになった。

- 1) 記念式典 4月4日美祿市で実施。
美祿市合併1年と桜祭りに合わせて式典を実施する。
- 2) AKIYOSHI メモリアルファンタジー
照明デザイナー石井幹子氏による秋芳洞、秋吉台の照明。
- 3) 秋芳洞大菊花展とお茶会
- 4) 写真展「開洞100周年展」
- 5) 美祿市歴史街道スタンプラリー
- 6) クラシックカーの祭典
- 7) 寿円禅師祭
- 8) 美祿大理石あかりコンテスト

その他、秋吉台科学博物館開館50年記念と日本洞窟学会秋吉台大会開催



私たちボランティアの会は、独自で、秋芳洞開洞100年を祝う会を開いたらどうだろう。私たちは、私たちでできる祝い方を考えたらいい。昨年弁天池で実施した紙芝居の会やコーヒーの試飲会は社会に影響を与えた。私たちの会の力を広く社会に印象付けたと思う。今回はさらに一歩前進した文化的な会を開くのも一つの案だ。皆さんで考えて、楽しくて、やりがいのある挑戦をしたらどうでしょう。

楽しい暮らしは自分たちで開くべきです。私たちがやりたいこと、新しい文化を創造するような、みんなで楽しむ会を開くべきだと思う。私たちの会にはすぐれた達人が揃っています。

100年前の梅原さんは、自分で開窟式を行い、たくさんの人々に喜んでいただいた。今も当時のことが語り継がれている。それが今日の秋芳洞観光のスタートになった。そして、秋芳洞観光はたくさんの方々の力で成長し、今日の秋芳洞・秋吉台観光が生まれた。

しかし、今、秋芳洞観光は入洞者の減少で再考が強いられ、観光のあり方の転換策が求められている。この100周年の祭りは、そのきっかけになる事業だ。

私たちは観光客に楽しみながら秋芳洞の真の価値を見つけだしていただくこと、さらに未来の理想世界を築く人を生み出すことに貢献できる小さな事業を行なうべきだ。

季節の話 1月
春の漢字

春は大地にエネルギーが充満している。ここから命が沸き立ち、春がスタートする。「春」という字がここから生まれた。

春の木は「ツバキ(椿)」だ。寒空に真紅の花びらをつけて、空に向かって大きく咲く。秋吉台では長者が森にたくさんの椿が生えており、きれいな花がいっぱい咲いている。

椿は花の落下(頭が落ちる)や濃い赤色が人々に強い印象を与え、妖艶なる美女を連想する場合が多い。夏目漱石は、椿が嫌いで、「あれほど人をだます花はない」という。彼は椿を見るたびに妖女を連想した。その妖女は「黒い眼で人を釣り寄せて、知らぬ間に嫣然たる毒を血管に吹く。騙されたと悟った頃はすでに遅い。」そんな妖女である。漱石に椿ざらいにさせたのは、歌劇 椿姫 らしい。

春の魚は「サワラ」だ。春にたくさんのサワラが集まり産卵する。卵は1.5ミリていどの浮遊卵である。この魚は瀬戸内海に多く、イワシやサバなどを食欲に食べる。この魚は白身で、刺身や塩焼き、みそ漬、照り焼きにするとうまい。春の魚だ。

春の鳥は「ウグイス」だ。ウグイスは「春告鳥」「春鳥」と呼ばれて、漢字は「鶯」が使われる。

最も難しいのは「春」だ。しゅんと読み、「おろか、乱れる」という意味である。何とも不思議な文字だ。

今月の作業

～作業、山焼、手づくり事業発表会～

1月25日(日) 道の修復

9時に旧管理事務所に集合、道の修復をします。

2月7日(土) 道の修復

9時に旧管理事務所に集合、道の修復をします。

2月15日(日) 山焼支援

詳細は次号で案内します。

2月28日(土) 道の修復

9時に旧管理事務所に集合、道の修復をします。

3月8日

自然共生ネットワーク・冬の集い

秋吉台の焼け跡を歩く。焼け跡を案内しましょう。

今年最初の集まりは、作業と楽しい新年会でした。

1月10日の集まりは、午前中は道の修復作業、午後には綾木ふるさとセンターで「すき焼きの新年会」を開いた。寒空でしたが、作業ははかどり、新年から順調だった。午後の新年会では、副会長の芥川さんのあいさつの後、楽しい会になった。

かくし芸では、上村さんの三味線演奏、内田・青木さんの舞踊が爆笑・大喝采を受けた。春から、楽しい集いの始まりになった。